

国際文化学部長 鹿毛敏夫教授の
「松浦鎮信～平戸から対外貿易を推進～」が掲載

●大分合同新聞朝刊 2023 年 11 月 24 日(金)

大友時代を
生きた人々

鹿毛 敏夫

松浦鎮信は、戦国時代に肥前国平戸（長崎県平戸市）を統治した戦国大名で、江戸時代の平戸藩初代藩主です。天文18（1549）年に生まれ、慶長19（1614）年に没したとされます。その統治前半期の九州は豊後国大友氏の最盛期で、鎮信の「鎮」は、19歳年上の大友義鎮（宗麟）の一字をもらい受けたものといわれ、これを偏諱といえます。晩年の出家後は僧侶の最高位「法印」に上り、「法印公」とも呼ばれます。

若いころの鎮信は、大友義鎮から武員2領を拝領しました。一つは「紺糸威肩白赤胴丸」。もう一つは「色々威腹巻」で、「大友御腹巻」のネーミングで平戸の松浦史料博物館に展示されています。「色々威」とは、鎧の各部を多色の糸でつなぐ手法のこと。また、「大友御腹巻」の名の通り、胸板部分に大友氏家紋「杏葉紋」が施されています。偏諱と甲冑の授受から大友義鎮と若いころの松浦鎮信が主従関係にあったといえ、文献史料からもその関係がうかがうことができます。

天正3（1575）年、薩摩の戦国大名島津義久の弟家久が

松浦鎮信 平戸から対外貿易を推進

伊勢方面を参詣した際の旅日記「中書家久公御上京日記」の7月13日の条を読むと、「唐船に乗り見物仕り候、なんはんより豊後殿へ進物とて虎の子四疋、それをめつら（珍）しく見帰り候」との記録があります。参詣からの帰途、平戸に立ち寄った家久は、港に停泊中の唐船（中国船）に乗って船内見物したのです。船には、絹織物などの中国産物資が多く積みまわていましたが、家久が目にしたのは4匹の虎の子。その物珍しい動物の行き先を船主に尋ねると、「なんはん（南蛮）」（東南アジア）から「豊後殿」（大友義鎮）への進物であるとの返事が返ってきたのです。

この記録から、16世紀後半、西九州の平戸の港に陸揚げされた東南アジアの物資が、松浦・大友の関係を通じて東九州の豊後へもたらされていたことが分かります。

その後、松浦鎮信は、自ら主体的に対外貿易を推進していきます。松浦史料博物館にある「法印公暹羅国主に与うる書案」という史料によると、天正4（1576）年と翌年に連続して、平戸にシヤム（タイ）国王使節が乗った中国船が来航。鎮信はこれをチャンスと捉え、自らシヤム国王に書状と甲を贈り、毎年1隻の船の定期的来航を求めています。加えて17世紀初頭になると、鎮信はオランダやイギリスからの使節を厚遇して平戸に商館の建設を許し、江戸初期の平戸貿易を主導していきました。

（名古屋学院大学国際文化学部長・教授）

11月1回掲載



「色々威腹巻（大友御腹巻）」松浦史料博物館蔵